

<研究ノート>

日本におけるマルサス学の二つの学統

久 保 芳 和

目 次

はじめに

一 堀・吉田に始まり、マルサス学会に結集する学統

二 南亮三郎に始まり、「人口学」建設に向うもう一つの学統

おわりに

はじめに

マルサスが日本でとりあげられたのは、明治の初年である。それ以来約100年が経過し、その間に多数の学者や思想家たちが種々の観点や問題意識から、マルサスを研究対象としてとりあげてきた。

しかし、おおざっぱに割り切っていえば、マルサスに関する文献は、「人口論」に関するものと「経済理論」に関するものという二つのグループに大別することができるであろう。

しかし、こうした二大グループに分けて、これまでの日本におけるマルサス研究史をたどることも、私の目的ではない。

こうした研究は、すでに、2～3の人々によって試みられているからである。例えば、市原亮平「わが国のマルサス研究史」(関西大学『経済論集』第7巻第4号、1957年7月)や、大淵寛「日本におけるマルサス研究の歩み」(南亮三郎・館稔編『マルサスと現代』一頓草書房—1966、所収)や、さらには柳田

芳伸「わが国におけるマルサス研究の動向」(『マルサス学会年報』創刊号, 1991, 所収)などの研究によって、その全貌が明らかとなっている。従って、私は、屋上屋を重ねるのではなくて、これらとはやや異なる、別のやり方によって整理を試みてみたいと思う。

過去の経済学者を取り扱う場合、日本では、率直に言って、余りにもマルクスの偏向に陥りすぎていたのではなからうか。

余剰価値学説史におけるマルクスの取扱い方が余りにも、意識的・無意識的に踏襲されすぎる結果として、マルクス経済学が健全な間は、マルクスの軽視した学者や学説は、たいていの場合、軽視されるか、無視されることが多かったのではなからうか。マルサスがとりあげられる場合でも、そういう感が強いような気がしてならない。

研究者たちがマルサスを論じる場合、かれらは、往々にしてマルクスの観点に立って過去の学者の所説を理解しようとしたり、あるいはマルクスにひきよせてそれらを理解しようとするから、その結果として出てくるものは、マルクスの偏向に汚毒された代り物にすぎなくなり、マルサスの原意を損ねかねない解釈となる危険なしとしない。これは、多分に、特殊日本的偏向であって、世界には通用しないものである。

このような特殊日本的偏向に組せず、できるだけ、マルサス自身に沈潜し、マルサスに内向しつつ、マルサスに接近しようという立場を、かりにマルサス学的立場と名付け、こうした立場でマルサスに接近しようとした研究者たちの系譜(学統)を辿ってみようというのが本稿の課題である。

一 堀・吉田に始まり、マルサス学会に結集する学統

マルサス学の一つの有力な学統は、堀経夫・吉田秀夫という師弟の研究に端を発し、マルサス学会という学会の形成をもって結実した一つの学統である。堀経夫はリカードを主たる研究対象とする学者であり、かれにはマルサスを直接対象とした著書はないが、訳書としては、吉田秀夫との共訳になるボナア

『マルサスと彼の業績』があるし、また入江奨との共訳たるマルサス『食料高価論その他』がある。また、マルサスという名前が論文の名称に出てくる論文だけでも9篇あり、論文名にマルサスは出てこないものの、リカードウを取り扱った際マルサスに言及したものは多数にのぼる。けだし、リカードウを研究しようとするれば、その論敵マルサスの研究は不可欠であるわけだから、リカードウ研究の大家・堀は、当然、マルサスにも通暁していたと言い得る。

堀のマルサス研究の学統は、その指導下の門弟によって次々に継受されていく。すなわち、東北帝国大学の門弟吉田秀夫、大阪商科大学の門弟入江奨、関西学院大学の門弟橋本比登志に脈々として継受されていく。そして、その学統はやがて外国のマルサス学仲間をも引き込んで、もっと国際的な広がりやまで発展し、終いに、マルサス学会の形成にまで発展していくという、運命を辿ることになる。

1 吉田秀夫

しかし、ここで特筆しておかねばならないことは、否、マルサス学の学統形成の上では堀以上に重要な役割を演じたといっても過言ではない、吉田秀夫の存在であったから、次に吉田に移ろう。

さて、吉田は、昭和9年(1929年)に、東北大を卒業したが、その翌年4月には、早くも、ボナア著『マルサスと彼の業績』を堀と共訳で公刊し、さらに引き続いて昭和6年には、『マルサス人口論各版の差異』を、翌昭和7年には『経済学説研究』を、昭和8年には『マルサス批判の発展』というように、マルサス研究の成果を次ぎつぎ精力的に公刊した。これらの素晴らしくスピーディな成果は、もちろん、吉田自身の月並みならぬ卓抜さと絶えざる精進努力に基づくものではあるが、かれの指導教授であった、堀の指導と鞭達、それに加えて、所蔵文献の利用に対して堀が示した、学究としての寛容さも与かって力があつたことも看過するわけにはいかないであろう(上記各著における著者の堀への感謝の辞を参照せよ)。吉田のマルサスへの傾倒はその後も変りなく続くのであるが、経済学原理の翻訳については、『経済学原理』

(上下)¹⁾として、昭和12年に、そして人口論の翻訳については、『各版対照マルサス人口論』(一～四)²⁾(昭和23～24年)が、それぞれ公刊されている。

かくして、東北大における堀のマルサス研究の学統は、先ず吉田秀夫に継承された。

2 入江奨

入江は昭和22年(1947)大阪商大を卒業したが、24年には『食料高価論その他』を堀と共に公刊し、以後マルサスを取扱った論文12篇、学会報告3篇を公表している。

かくて、大阪商大における、堀のマルサス研究の学統は入江によって継受されている。

3 橋本比登志

橋本は昭和32年(1957)関学大を卒業したが、大学院に進んでからは堀の指導を受け、以後マルサスを取扱った論文12篇(英文3篇を含む)を公表し、また昭和62年(1987)には『マルサス研究序説』を公刊した。

かくて、関学大における、堀のマルサス研究の学統は橋本によって継受されたといえる。

4 「マルサス学会」設立に向けての動き

久保は堀に師事すること50年の長きに及びながら、堀のマルサス研究の学統を継ぐ研究業績を挙げることなく現在に及んだが、新しく発見された「マルサス文書」の日本への導入の可能性およびその利用可能性が濃厚化する状況が現出するに及んで、マルサス研究者集団を結成・組織する必要を痛感して、日本および外国におけるマルサス学者(入江奨、橋本比登志、羽鳥卓也、溝川喜一、森茂也、永井義雄、須藤壬章、Winch, Pullen)に働きかけて国際的な「マル

1) これは、プレ編の『経済学原理』の集注版に匹敵しうる、すぐれた成果である。

2) これも、P. ジェイムズ編の『人口論』の集注版に匹敵しうる、すぐれた成果であったのに、翻訳の性質上、日本語で発表されざるをえなかったことが惜まれる。

サス学会」を設立することに踏み切った。

そして結局、平成3年(1991)5月24日、「マルサス学会」は成立する運びとなった³⁾。

こういう経過を考え合わせれば、堀・吉田によって播種された「マルサス学」の学統は、「マルサス学会」の成立によってやっとその実を結んだと言いうるのではなからうか。

二 南亮三郎に始まり、「人口学」建設に向うもう一つの学統

昭和4年から6年にかけてつぎつぎに発表された吉田秀夫の一連の諸論文はまとめられて『経済学説研究』と題する一書となった。これに対して『人口法則と生存権論』の著者・南亮三郎が書評を書いたことから、両者間には、はからずも、マルサスの本質をめぐる論争が闘わされることになり、大淵寛の表現をかりていえば、「昭和7年以降のマルサス研究は当分のあいだこの論争を軸として発展したといってもよい」(大淵寛「日本におけるマルサス研究の歩み」、南亮三郎・館稔編『マルサスと現代』第13章第2節マルサス人口論研究史(二)所収)という状況にあった。

学説史の示すように、吉田・南の両雄はたしかに、その当時、マルサス研究者の双壁であったから、両者の間に交わされた論争は、さぞ圧巻であったことだろう。

両雄の間の論争の内容や経過の細部については、上記の大淵論文に譲るとして、ここでは、一方の雄・南の指導の下で、自ら自然発生的に、マルサス学のもう一つの学統が形成されていったという事実に注目せざるをえない。

南はやがて小樽から中央大学に転じるが、ここでは、人口学研究会を通じて、

3) マルサス文書の発見およびこの文書のわが国への導入の経緯、さらにはマルサス学会の成立にいたる詳細な経過については、久保芳和「マルサス文書について」 「マルサス文書の行方とマルサス学会の成立」(以上いずれも、関西学院大学『経済学論究』に掲載)を参照。

みずから多数の著作⁴⁾を出版するとともに、多数の優れた「人口学」者の集団を育て上げていったのであって、これは、マルサス学のもう一つの学統というよりも、むしろ「人口学」という、新しい総合科学の建設をめざす、一つの新しい学統が形成されつつあるといったほうが適切であるかもしれない。

南は「総合科学としての人口学」を提唱する。かれによれば、「経済学者が体系の変化のために人口研究を枠外に投げ出している間に、それをゆずり受けるものごとく勃然として興こりはじめた他の諸学からの研究方向」があった。

「少なくともわれわれはいま、ケインズ以後において人口研究の復位をとげようとしている経済学のほかに、社会学と生物学そしてデモグラフィが、三重にも四重にもかさなり合いながら人口現象をめぐる活潑に動きつつあるのを目撃する。そこには少くとも四つの人口論が、四つの人口研究の見地が対立しているのである。」

「この四つが、はたして、またいかにして統合にもちきたしうるかは、人口研究の諸学者に課せられた究極の課題」であるが南は、その際、「経済学的人口論の虚を突いて社会学的人口論の体系を築きあげたマッケンロートの業績『人口論—人口の理論、社会学および統計学』(1953年)を高く評価しながらも、「人口理論は決定的に社会学的でなければならず、人口問題の最終の判定者は社会学者でなければならない」と主張する偏局性には組しえず、同時に他方では、「人口理論をその生まれ故郷たる経済学の領域にひき戻す」と宣言する経済学者クーンツにも組しない。

そして人口研究の統合化という課題に取り組もうとする。ここでかれは、1957年に刊行された『人口大事典』が、経済学、社会学、生物学およびデモグラフィの四領域を横ぎっての、いわば世界最初の総合的な人口研究の集成であっ

-
- 4) 『人口理論と人口問題』千倉書房、昭和10年。
 『人口理論と国際貿易』大同書院、昭和13年。
 『人口原理の研究—人口学建設への一構想』千倉書房、昭和18年。
 『人口論』三和書房、昭和29年。
 『人口学総論』千倉書房、昭和35年。
 『人口思想史』千倉書房、昭和38年。

たことを評価すると同時にその2年後、すなわち1959年にアメリカで出版されたハウザーおよびダンカン共編の『人口研究』もまた、日本の『人口大事典』と同じく関係諸科学の統合化という問題意識から出発していることに注目している。

南はいう「われわれの求めてやまないもの、究極的に到達しなければならないものは、やはり関係諸領域の統合である。総合科学としての人口学—それがわれわれに課せられた究極の目標である。」と⁵⁾。

おわりに

以上で見たように、わが国におけるマルサス学の学統には、大別して二つの学統が認められる。すなわち、堀・吉田に始まってマルサス学会に結集する学統と南に始まり「人口学」の建設を志向する学統との二つである。しかし後者は、マルサスを出発点としながらも、マルサスのみに終始することなく、むしろマルサスから離れて新しい総合科学としての「人口学」を建設しようと志向する点から見れば、もはやマルサス学ではなくて、人口学の領域に入りこんでいると言えなくもない。

そこで、われわれは、マルサス自体にこだわりつつ、すなわちマルサスに内在しつつ、マルサスの学問体系全体を再吟味しようとするアプローチをもって、マルサス学と名付けるとすれば、こうした立場はマルサス学の、いわば、本流であるといって差し支えない。事実、こうした視点に立って、マルサスを再検討しようとする外国学者も依然として跡を絶たない。

パトリシア・ジェイムズやウィンチや、ブレンといった学者たちの業績に注目する必要がある。そしてウィンチもブレンもわれわれの「マルサス学会」の設立に賛同してくれたのも理由のないことではない。

最後に、実に多数にのぼるマルサス研究の著作や論文が存在するにもかかわらず

5) 南亮三郎「総合科学としての人口学」(南亮三郎編『人口論史』序章 人口学への道 13~16ページ参照)

らず、これらに大なたをふるって、マルサス学に二学統のみしか存しないかの如く割り切った取り扱いを敢てしてしまった非礼を研究者各位に深くお詫びしておきたい。